

今回の特集は、転移性脊椎腫瘍に対する包括的治療について、それぞれの専門家がその特徴を詳細に論述されている。私にとって、転移性脊椎腫瘍といえば1990年 *Spine* に掲載された徳橋先生の予後予測、そしてTESを開発された富田先生の転移巣、全身状態を加味した手術ストラテジー（2001年 *Spine*）、さらには片桐先生の予後予測をするうえでのスコアリングシステム（2005年 *JBJS Br*）が浮かんでくる。

私が1995年にミネアポリスのスパインセンターへ留学した際、多くの海外の医師たちに「転移性脊椎腫瘍の徳橋スコアは素晴らしい」と伝えられ、同じ日本人として誇らしさを覚えたことを記憶している。

これらの転移性脊椎腫瘍に対するスコアリングシステムができてからすでに20年近くが経過しており、原発巣に対する放射線療法や化学療法、特に分子標的治療の進歩、そして最近では骨修飾薬であるビスホスホネートのゾレドロン酸、抗RANKL抗体のデノスマブの導入により、転移椎体の骨硬化、安定化が得られ手術を回避できる症例も多く存在するようになった。放射線療法も大きく変化した。特に定位放射線療法、陽子線、そして重粒子線まで登場し、より腫瘍に局限して治療効果を上げることが可能となってきた。しかし、手術療法はもちろん必要である場合も存在し、その技術も富田先生開発のTES以来格段に進歩した。この20年ですべての治療分野が進歩し、転移性脊椎腫瘍は「不治の病」ではなく、寛解、あるいは完治できるまでになってきたといっても過言ではない。

このシリーズを読まれた読者にとって、転移性脊椎腫瘍に対する治療戦略はきっと新たなものになったに違いない。

今回の企画を立てられた田口先生に深謝したい。

（松山幸弘）

論文外部審査委員

朝妻孝仁 嶋村 正 高橋和久 高橋啓介 松永俊二
持田譲治 山下敏彦 久保和親 庄田 基 水野順一

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

長島親男 小野啓郎 萬年 徹
高橋 昭 金田清志 小山素磨
小柳知彦 田代邦雄 国分正一
服部孝道

編集委員

戸山芳昭（編集委員長）
青木茂樹 安藤哲朗 金 彪
園生雅弘 高安正和 田口敏彦
谷 論 徳橋泰明 花北順哉
飛驒一利 松山幸弘 山崎正志
米延策雄

Vol. 28 No. 12
(2015年12月25日発行)

毎月1回25日発行

1部定価（本体2,300円＋税）

（配送料別）

年ぎめ予約購読料 30,700円＋税

送料弊社負担

発行／株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

（担当：山岸）

印刷所／三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所／

（株）文栄社

TEL 03-3814-8541

（株）ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.

6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2015,

Printed in Japan

JCOPY 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。